



放課後、不良生徒がさぼるのによく使用している屋上倉庫で一人の男子生徒がタバコを吹かしながらマットの上で寝転んでいた、その周りには缶ビールの空き缶まで転がっている。「あなた終業のチャイムはとつくに鳴ったわよ、こんな所で何をしてるの!」
「あん?」
そんな彼を女教師高城寛子がそばに立ち、男子生徒を見下ろしている。
「なんだよ……先生」

「あなた、今日の授業に出ていないでしょ! ずっとここできぼっていたの?」

「それがどうしたよ?」

「どうしたもこうしたもないわよ! ちゃんと授業に出なさい!」

「うるせえなあ……」

寝転びながら高城を見上げると男からはスカートの中が丸見えでそれを見てニヤリと笑みを浮かべる。



（パンティー丸見えじゃねーか、気づいてねえのか？それともわざと
見せつけてんのかよ？）

高城先生の大人っぽい紫のパンティーを見て雄の本能を刺激された彼の股間に
血液が集中していきズボンの中でムクムクと硬く大きくなるのを感じる。

「もういいわ早く起きて、帰りなさい」

「へいへい」

そう言うって立ち去ろうと背を向けた高城を後ろから抱き寄せる。

「きゃっあー？な、何？、何をしているの！離しなさい！！」

突然背後から抱きしめられ胸に手を伸ばし、柔らかな乳房をこねくり回してくる。

「いやっ！止めなさい！！大声出すわよ！！」

「無駄だぜ先生、こんな時間にこんな所へ人なんか来ねえよ」



必死に抵抗する高城だが男子生徒の力が強く振りほどけない

「前からこのデケー胸触りたかったんだよなあ、想像通りやわらけー」

「んくう……はうっ」

イヤらしい手つきで高城の胸を揉む男の股間が尻に押し付けられる。

「俺のチンコもビンビンになってきてるぜ、分かるか？」

「そ、そんなモノ押し付けないで！汚らしい！」

酒臭い息とタバコの匂いに顔をしかめ抵抗を続けるが、男子生徒は

ますます興奮していく。

「おとなしくしろよ先生、気持ちよくさせてやるからさ」

「あっく、誰があなたの言いなりなんか……んああっ」

男の手がブラウスを掴み左右へと引き裂いた。

「きゃあぁー」

ボタンが飛び散りブラジャーに包まれた豊満なおっぱいが露になる。

「おお、いいね先生、エロい下着つけてんじゃん」

「いや、見ないで……」

ぶるんっ♡

ぶるんっ♡

ガッ

レースで装飾され光沢のある紫色のブラジャーを着けているおっぱいを
まじまじと見つめられ羞恥する高城。

「すげえデカいな、Fカップはあるんじゃないかねえか？肌も綺麗だしたまんねーな」

両手で男が包み込むようにブラの上から胸を掴んできた。

「ああ〜柔らかい、すげえポリユームだぜ」

「んふう……」

揉みしだかれ男の手の中でグニグニと形を変えるおっぱい。

「あああ……いやあ……」

布越しでも伝わる男の指使いに思わず甘い吐息を漏らしてしまう。

ああ

むにゅん

むにゅん

むにゅん

むにゅん

はー

「先生感じてんのか？乳首も立ってねーか？」

「そ、そんなはずないわ……」

否定するが顔はすでに赤く染まり目はトロロンとしていた。

（ああ、だめ……胸を触られたただけなのに身体の奥がきゅんって熱くなる）

男の手の動きに合わせて合わせるように高城の腰がくねる。

「へへ、腰振っちゃってエロイぜ先生」

「くう……」

胸の感触を一通り楽しんだ男は高城を正面に向かせ壁に押し付ける。
「へへ、先生キスしようぜキス、んー」
そう言っつて男の唇が迫って来る。
「さ、さやっ!!」

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ

ん、ん、ん

ぐっ、ぐっ

顔を背け拒絶するが押さえつけられ無理やり口づけさせられてしまう。

「んぐう、んー!!」

濃厚なデュープキスで口を塞がれ唾液を流し込まれる。

ニコチンとアルコール臭が入り混じった味に吐きそうになる。



「ふはあ、はあ、はあ……」

ようやく男が離れると二人の間に唾液の糸が伸びて切れた。

「どうだった先生？俺とのチューは？」

「最低よ……」

悔しさと怒りで涙目になりながら睨みつける高城だが頬を上気させ
腫は潤み頬を紅潮させていて迫力はなくむしろ扇情的だった。

はー

はー

たろー

むい

むい

その表情に男はさらに興奮してブラをずり上げるとブルンツと
大きな巨乳が飛び出してきた。
「うひょー、大きさも色も綺麗なピンクの
乳首じゃねーか、美味そうだ」
「お、お願いだからもう止めて……」
「止めるわけねーだろうが」

リ
ズ
ル
ル
ンッ……♡



そう言うとなんは高城の乳首を口に含んだ。

「ひゃうん!？」

生暖かい舌で舐められ吸われ、甘い快感を感じてしまう。

「んあぁっいや、気持ち悪い、やめなさい!んはあつ!!」

なんとか逃れようと身をよじるが力が入らず男を振り払えない。

「へへ、感じてるな、乳首が硬く勃起してきてるぞ先生」

「違う!それは……」

否定しようとするが下半身が熱くなり

モジモジと太股を擦り合わせて体を震わせる。

唾液をたっぷりとまぶしながら乳首をむしゃぶり続ける男。

「くふう…あんっ!いや、こんな…はあぁあつ」

むちゅ、ぬちゅ、ちゅう、レロオ

「んくっ!あつ!くふうっ!」

「ほらもつといい声出させて、ここには誰も来ねえから」

「だ、誰が…あうっ!ああん!ダメっ!」

あ

はあ

はあ

はあ

ぐに

ぐに

ちゅっ♡

ちゅる♡

むいっ

むいっ むいっ…

尖っている両の乳首を指で摘んでクリクリとこねる。

「はうっ！そんな強くされたら……あふう！いや！はああーっ！」

「乳首気持ちいいかい先生？」

「そ、そんなことないわ！」

「素直になれよ、本当は気持ちいいんだろ？」

「き、気持ちよくなんかないわよ！」

強情を張る高城に意地悪く笑う男。

「あつくう、んふう、んあつ、あああつ！」

グニユグニユと乳房を揉まれながら乳首を責められ続け

高城は腰砕けになって座り込んでしまう。



「へへっ、今度は俺のをしゃぶれよ」

「い、嫌よ誰がそんなモノ！」

ズボンを脱ぎ半裸になった男が高城の頬に亀頭部分を押しつけてくる。

ヌルヌルと光る先走り汁が顔に塗られ汚される屈辱に唇を噛み締める。

「んくっ、やめて汚らわしい」

「口開けるよ」

「いやよ」

「なら無理矢理ぶち込むぜ？」

グニ
グニ

拒否する高城の顔にぐいぐいと肉棒を押しつけてくる男。

鼻をつく悪臭に思わず吐きそうになる高城だが口を閉じ必死に耐える。

「ほれ、どうするんだ？俺はどっちでもいいけどよ」

「……くっ、口ですればいいのね……」

仕方なく高城は男根を手で掴み口に含んでいった。

「歯を立てるなよ」

「……」

屈辱に耐えながらフェラチオをすると男は満足そうな顔を浮かべ頭を撫でてくる。

「おお、上手いな先生、今まで何本くわえ込んだんだよ」

その言葉にキツつと睨み付ける。

「おっ怖え、でもそんな表情もそそのなあ」

「んぐう……じゅぶ、ちゅぶ、じゅるる」

喉の奥まで飲み込み奉仕を続ける。

口内に含んだ肉棒に舌を絡ませ濃厚なフェラを続けていくうちに男の息遣いが荒くなる。

しゃぶしゃぶ

「ハアハア、スゲーな先生、そんなテクニクどこで覚えたんだ？」

「うるひゃいわね……黙ってなしゃひゃひゃいよ……」

亀頭部分から滲む先走り汁の苦味に眉をしかめながらも懸命に舌を使い吸い上げていく。

ジュポツ！ヌプツ！グチュツ！

嫌悪感を抱きつつひたすらに男をイカせようと高城は必死に奉仕しを続ける。

「んぐつ、くそつ、出そうだ」

「んんっ！？」



「ふい〜出した出した」

射精を終えズルリと口から抜かれる男根。

ゴホゴホツと咳き込みつつ飲みきれなかった白濁した液体が高城の口から胸元にかけて垂れ落ちる。

「げほっ！うええ酷い味……」

「ははは、わりいな先生。お詫びに今度は気持ちよくしてやるよ」

「えっ？……きやああー！！」

はあ

はあ

とろー

とろ
とろ

シャツを剥ぎ取りマットへと押し倒してスカートを捲り上げ両足を広げると露になる紫色のパンティー。

「だめっ！見ないで！」

慌てて両手で隠そうとするが時すでに遅く、股間部分の染みを見られてしまう。

「なんだ先生、濡れてるじゃないか」

「ち、違、これは……」

恥ずかしさに顔を真っ赤にして震える。

「大丈夫だって、俺がちゃんと気持ちよくしてやるからさ」

「い、いや……やめ……んくう」

ジワァァァ……♡

男の指が割れ目をなぞりながらクリトリスを刺激する。

「ひゃうんー?」

敏感な部分を触られビクンと身体が跳ね上がる高城。

「おいおいこんなんでは感じるのかよ先生、淫乱だな」

「いや、いや、触らないで!」

スリスリと擦られる度に快感が沸き上がり声が抑えられなくなる。

「ああっ!ダメっ!そこはダメなの!」

「ここが良いんだろ?」

グチュグチュと水音が響き渡り股間の染みが広がっていく。

「ああん!そこばかり弄られたらあ!、はあん!」

恥ずかしさに顔を赤くしながら身悶える。



男はパンティを横にずらし、ビクビクしてゐる。
秘所に舌を這わせる。

「んはあぁっ、やめっ、それは駄目え!!」
ヌルヌルとした舌の感覚に腰を震わせてしまう。
ジュルツ、ピチャッ、レロオ

や

あ

っ

じゅる
じゅる
じゅる

くちゅ
くちゅ
くちゅ

「これが好きなんだろ」

「ひゃん! だめよやめてえ」

大事な部分全体を舐められ吸われ高城は
甘い声を上げてしまう。

「ほらもつと感じろよ」

「いや、いやああ! そんなに強くされたら私
あうううっ!」

快感が背筋を走り抜け腰を浮かせて身悶える


「んあぁっ、ああ、やつ、あんっ、あぁあ」

男の唾液と愛液で濡れたアソコはビクつき

物欲しげに脈打っていた。



「それじゃ本番行くか、脱がすぞ」
そう言つてパンティを一気に引き下ろすと
片足だけ抜き取り足の間で体を割り込ませる。



「へへ、もう準備万端じゃねえか」
「い、嫌……お願いだから許して……」
「何言つてんだよ、これからが本番
だろうが」
男は制服を脱ぎ捨て全裸になると
ギンギンに反り返った肉棒を
オマンコにあてがう。

くちゅっ
くちゅっ♡

ビクッ♡
ビクッ♡

ズブズブ

「うほお、スゲー締め付けてくるぜ」

「んっくっ、うう……」

「だめっ感じてはだめ！」

唇を噛み締め耐えようとしますが男がゆっくりと動き始める。

ヌチュッグチュッ

ヌチュッグチュッ

「んぐっ、くうっ、ふっ、んっ、うっ」

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

ズブズブ

いよちゅ

いよちゅ

いよちゅ

ニイニ

ニ

ニ

ニ

い

あ♡あ♡

あ♡あ♡

♡

膣内をかき回される度に快感が沸き上がってくる。

「どうだ先生、気持ちいいだろ？」

「うう、だ、誰が、貴方なんかで……気持ちよくなって……」

「そうか？俺はすげー気持ちいいけどな」

グツチユグツチユグチュン

「んくう！そ、それ止めなさい！激しくしないで……！」

子宮口を突かれ身体を仰け反らせ喘ぎ声を上げる高城。

「おおっ締まるぜ、そんなに俺のチンポがイイのかよ」

「違うわ！私はあなたみたいな最低の男にこんな事されても感じたかなんか……」

「素直になれよ、本当は嬉しいんだろ？」

「はあはあ、嬉しくない、全然気持ちよくなんか、んはあっ、な、ないわ」

強情な態度を見せる高城に男はニヤリと笑うとピストン運動をさらに速める。

「んああっ！？だめえ！速くしたらだめえええ！！」

「おらおらー！さっさと認めちまえよ！先生はちんぽが好きつてよ！」

「あああつ、ち、違う、私は……あんっ！くふう……動かさないでえ！」

必死に耐えようとするが男の激しい突き上げに腰が浮き上がりそうになる。

「あああ！だめえ！そこは弱いの！そこはっ！責めないでええええ！！」

ぷるんっ♡

♡F

♡F♡

ぷるんっ♡

はあ

はあ

ぷるんっ♡

ある一点を突かれると今まで以上に快感を感じる場所があり
高城はその度に喘ぎ声をあげてしまう。

「ここか？、ここがイイんだなり！」

「んくううう、そこはあ……はあん、んああつ、あああふう」

男が腰を打ち付けるたびに豊満な胸が激しく上下に揺れ動き男の目を楽しませる。

おっぱいっ♡

揺れ動く胸を掴んで乳首を吸い片方の手で揉み始めると高城の回から甘い声上がる。

「ああっ！胸まで、だめ！胸を触られたらっ、んはあっああ！」

「へへ、やっぱり先生は淫乱だな、生徒に犯されて感じるなんてよ！」

パンパンパンパンッ！

「んあう、やめなさい、ひゃうん！」

「へへ、こんなに乳首硬く勃起させやがって、感じてる証拠じゃないか」

「いやあ、言わないで…、はああん」

コリッコリッと指先で転がされ

舐められ吸われる度にビクンビクンと感じてしまう。

「んひい！乳首だめええー！」

乳首を弄ばれながら激しく突き上げられる

「んっふあああ、だめ、ちくび、ちくびああああ」

グニッ

グニッ

グニッ

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

「ハァハァ。先生キスだ。舌出せ、舌」

言われるままに舌を差し出すと男の舌が絡み付いてきた。

「んむう、ちゅぷ、れるお、んはあ、んうう」

口内を蹂躪する舌の感覚にゾクツとする。

「んっ、んふう、んんんっ」

「んあ、ちゅぷ、れる、んむう」

ディープキスをしながら激しく腰を動かす男。

「ちゅぷ、れる、じゅるる」

ちゅぷ、れる、じゅるる

ちゅぷ、れる、じゅるる

ちゅぷ、れる、じゅるる

(嫌なのに……どうして)

嫌悪感しか無かったはずの行為が

今は快感として受け入れている事に戸惑いながら

男を抱き寄せ自らも積極的に舌を動かしてしまう

「んむう、ちゅぷ……んふう、じゅる、ちゅぷちゅぷ」

お互いの口内を犯し合い唾液を交換し合う二人。

結合部からは大量の愛液が流れ出しておりシートに

大きな染みを作っている。

「へへっ、いい顔するようになって来たじゃないか先生。」

「はあはあ、だ、黙りなさい……」

汗だくで顔を真っ赤にし、だらしなく口を開け、目を潤ませるその表情で
凄まれても迫力など全く無い。

「素直になれって先生、ほら」

「きやあ、ちよつとおー!!」

ドキ…

ドキ…

ハア
ハア



男は高城を抱え上げ後ろを向くようにすると

尻を突き出すような体勢を取らせ背後から再び挿入した。

「あああー！そんなつ、だめえ、お、奥に届くうっ！！」

バックからの突き上げで子宮口に亀頭が当たるたびに高城は悶える。

「どうだい先生、この体位からの俺のチンポの味はよお」

「だめえっ！んあああ、いや、当たってる、当たってるのっ！あああん」

パチュン、パチュンと肉同士がぶつかりあう音が響く。

(ダメっ、こんな気持ち良すぎるうー！)

高城の顔は完全に蕩けており、もはや抵抗の意志すら残っていないようだ。

「言えよ先生、気持ち良いんだろ！」

「あああ、言えない、だめえ、そんな事の言えないわあ」

しかし、身体は正直に反応してしまい膣内はキュウウつと締まり

子宮口は亀頭に吸い付いてくいる。

「強情だねえ、ならもっと激しくしてやるぜ」

あ、あ、あ

あ、あ、あ

あ、あ、あ

あ、あ、あ

ぽちんっ♡

ぽちんっ♡

ぽちんっ♡

グチユグチユと結合部から愛液を撒き散らしながら
男はラストスパートをかける。

「先生、中に出してやるぞ！」

「んああいやあつ、な、中は駄目え、危険日なの！」

「赤ちゃん出来ちゃううー！」

「嫌だね、絶対中に出して、孕ませて俺の女にしてやるよ！」

「やめてーそ、外に、外に出してえー！」

「イクぜ、中出しでイケよ、全部受け止めてイケッ、

おおおおおおおつー！！！」

どびゅっ！どびゅるるるるるるるるっ！！



「んあああああつー！熱いっ！ドクンドクンと脈打ちながら精液が流し込まれる感覚に
高城は絶頂を迎える。」

「いやあああああつ、出てるー中にいっぱいー！
熱いっ！イク、イッチャうううっー！！」
「臍内に射精されると同時に絶頂を迎える高城。
全身が痙攣を起こしアソコからは大量の潮を吹き出している。」



どろお〜♡

「はあ、はあ、はあ……んあぁ……」

男根をズルリと引き抜くとごぼりとマンコから入り切らなかつた
精子が溢れ出てくる。

「ふう、最高だったぜ先生」

満足げな笑みを浮かべると男は高城をマットの上に寝かせる。

「ん……はあ……んう」

高城は虚ろな目をしながら呼吸を整えていた。

「これであんたは俺の女だな」

「ハアハア、だ、誰があなたなんかのものになるもんですか……!」

息を整えながら高城は強気な態度を取り、睨みつけてくる。

「へえ、まだそんな態度取るのかよ」

「体を汚されたくらいで私が屈するとでも思ったら大間違いだわ……」

「ふうん、なら試してみるか?」

はあ
はあ
はあ

出した直後だというのに男は勃起したままの肉棒を見せてつづけてくる。

「なっ!」

「俺はまだまだ満足しちゃいないんだぜ?もつと付き合ってもらおうからな」

「ま、待ちなさい……やつ、これ以上はだめえ……んああ、やあああつ……」

静止の声を無視して再び肉棒が挿入され身悶えする高城であった……

「ふう、出した出した、さすがにもう打ち止めだぜ」

あれから何時間たったのだろうか、すっかり日が暮れてしまっている。

男は満足げな様子でマットの上に寝転んでいる高城を見る。

「あひい、んああああ……あああ……んはあ……んはあ……んくう」

高城の目は虚ろで口の端から唾液を垂らし、全身精液まみれで足を広げたままビクビクと痙攣して膣内からは入りきらなかった大量の精液が流れ出ている。

「先生マジエロかったぜ。またやらせてくれよ」
男は身支度を整えながら高城に語りかけるが返事は無い。
「んじや、俺は帰るけどしっかり片付けしといてね」

は

……

ビク

ビク

は

……

ビク

とろろおー

ビク



アノ日を境に、男子生徒は頻繁に高城を呼び出し犯すようになった。



その度に高城は嫌々ながらも受け入れ、度重なる行為によって完全に堕ちてしまい次第に自から求めてくるようになっていった。



「はぁんはぁんあぁあつーんあぁんもつとお！もつと突いてえ！」
放課後の体育倉庫では女の喘ぎ声と肉と肉のぶつかり合う音が響いていた。
パアンパアンと激しく腰を打ち付ける音に合わせて揺れる豊満な乳房に
男が手を伸ばし驚掴む。

はぁん

はぁん

あぁん

あぁん

あぁん

あぁん

あぁん

あぁん

あぁん

「いいい！おっぱい気持ち良いのぉ！あぁあつーもつと揉んでえ！
普段の彼女からは想像も出来ないような乱れっぷりだった。
「どうだい先生、俺のチンポ美味しいか？」
「イイっ！イイわぁ！すごい気持ちいいっ！」

グニ

グニ

グニ

グニ

グニ

数ヶ月後、男子生徒との快樂に身を任せたままの生中出しセックスを続けた結果高城の妊娠が発覚した。

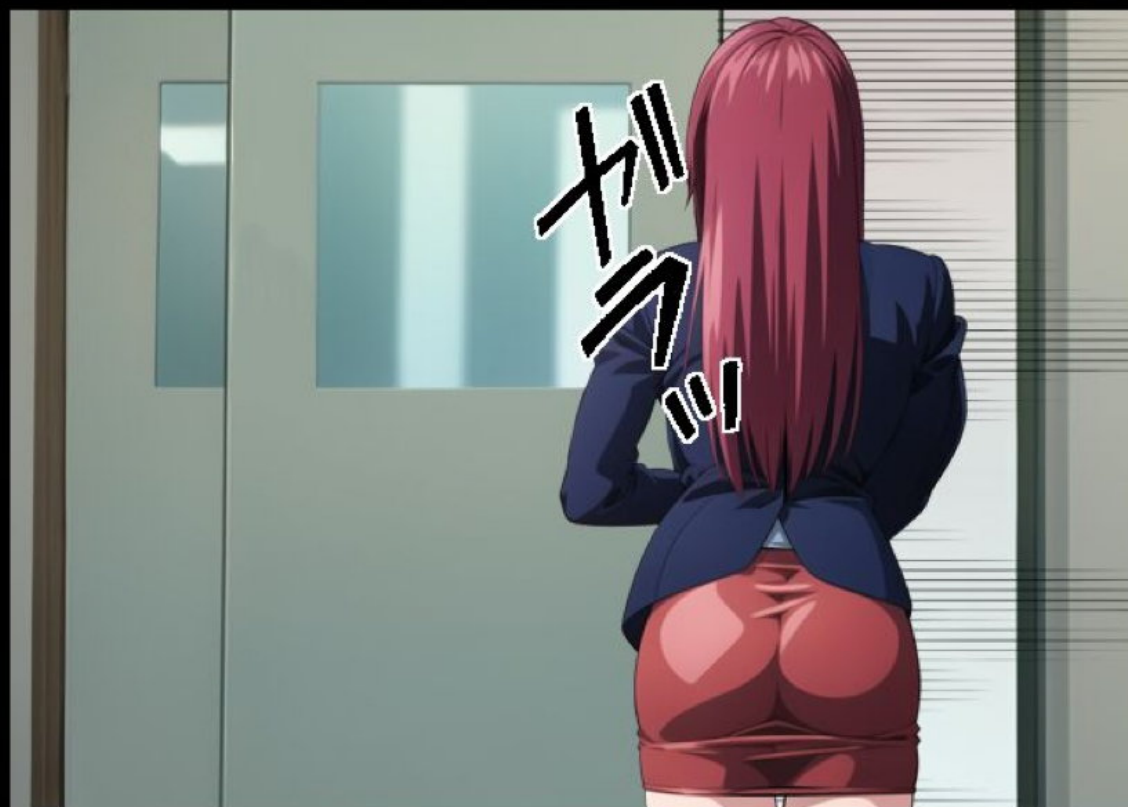


教師が未婚での妊娠発覚当然学校は騒ぎになったが彼女は冷静に対処し学校側もそれを了承。

お腹の膨らみも目立つようになってきたが授業も普段通り続ける高城の今日は特別授業だ。



男子生徒は高城を自分の女だと言わんばかりに妊娠についての特別授業を行うように指示を出していた。



「そ、それでは皆さん、本日は保健の授業を行います」

教壇に立つ高城の姿はお腹は大きいのが妊婦とは思えない程にスタイルが良くその美貌も相まって非常に魅力ある姿だった。

「先生、質問良いですか？」

一人の生徒が手を上げる。

「はい、どうぞ」

「先生がどうやって赤ちゃん出来たのか教えてください」

ニヤ付きながらわざとイヤらしい質問をする生徒に対して高城は頬を赤らめながら

恥ずかし気に答える

「そ、それはですね……男性の性器には精子というものが存在して、女性の体内に入ると卵子と結合して子供が出来るのです」

「へー、じゃあ先生はその男とエッチして妊娠したんだね」

「え、ええ、彼とは数え切れないほどに交わり合いました。もちろん避妊なんて一切せずに……」

その行為を思い出したのか顔を真っ赤にしてモジモジとしていた。その様子を高城を妊娠させた男は満足げにニヤ付きながら眺めているのであった。

完

















































